

三河アララギ

平成三十年 2018年

五月号

第六十五卷 第五号



ニューヨーク日記(139) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NY. Restaurante

Blue Shoe Diaries



美味しいステーキ食べたーい！ って思ったらタイミング良くアルゼンチンのシェフ、Francis MallmannがNYの私達が好きなレストラン、Il Bucoで一晩だけ彼のレストランに！ 聞いた瞬間早速予約入れました！ それで今日食べてきました！ アルゼンチンの味！ チミチューリが特にうまーい！

We were craving meat! And what do you know, I heard that chef Francis Mallmann will be cooking dinner at Il Buco for one night! Lucky me! We satisfied our craving and got our taste buds to travel to Argentina for tonight. That chimichurri was amazing!

表紙・罌粟	今泉 由利 (1)	水野 絹子 (26)	浜田 紀政 (35)
ニューヨーク日記 (139)	Blue Shoe (2)	牧原 規恵 (26)	松本 周二 (35)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	稲吉 友江 (26)	重野 善恵 (35)
三河アララギ歌集Ⅶ	大須賀寿恵 (5)	鈴木美耶子 (27)	今泉 由利 (36)
歌集『續草々』	今泉 米子 (6)	吉見 幸子 (27)	柳田 皓一 (36)
三河アララギ歌集Ⅶ	河原 静誠 (7)	牧原 正枝 (27)	今泉 如雲 (36)
催花雨	岡本八千代 (8)	石田 文子 (27)	植村 公女 (37)
ひな祭り	弓谷 久子 (10)	森 厚子 (27)	田中 清秀 (38)
富貴寄	今泉 由利 (12)	現代学生百人一首	かさね吟行会
夫を偲びぬ	林 伊佐子 (13)	東洋大学	『酔いの徒然』 (73)
石巻山	安藤 和代 (14)	山口 岬姫 (28)	ある自然科学者の手記 (72)
椿	清澤 範子 (15)	小林あゆみ (28)	『江上浩二の独り言』
時空	伊藤 忠男 (16)	近藤 菜於 (28)	『江上浩二の独り言』
啓蟄	森岡 陽子 (17)	劉 婧彤 (28)	絹の話 (90)
花かげ	足立 晴代 (18)	吉田 莉菜 (29)	楽しい時間 (66)
城南宮	白井 信昭 (19)	花田 里桜 (29)	漢詩研修 (十九)
小江戸佐原	杉浦恵美子 (20)	池内絵美香 (29)	『歴代天皇御製歌』 (八十八)
貝母の花	山口千恵子 (21)	山田 尚 (29)	貫名海屋資料館 (52)
平凡な日々が好い	夏目 勝弘 (22)	鮫島 満 (30)	梅から桜に
歌集『夢のつづき』	水上 信子 (23)	津之地直一 (31)	『水魚』のことから (208)
三宅千代遺歌集『永き日を』	(24)	童謡 ゴウさんとんだ	みなさまへ (13) (14)
贈呈誌	森岡 陽子 (25)	高橋 育郎 (32)	編集室だより (二〇一八年三月)
『ことよせ』	山崎 俊子 (26)	紅玉堂書店 (33)	三河アララギ (58)
『ことよせ』	三田美奈子 (26)	山迫 京子 (34)	野菜・まんだら (3)
		森岡 陽子 (34)	森岡・今泉 (59)
		田中 清秀 (34)	『三河アララギ』について (60)

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御 津 磯 夫

酸素テントの中なる貌の寂まりてほそきいのちのたたかひ勝てよ

生きながら若き比丘尼のすがたして脳外科棟に子はよこたはる

三十七の年ことごとく清かりし子をいひあひてこゑ泪ぐむ

いのちあらばまたふたたびの黒き髪いのちのまへに惜しむことなし

よみがへりくるべき記憶ただに待つ本草こぞりて咲きゆく春ぞ

住吉の榆の小枝の芽ぶきつつ祈りはかへるとほき子のうへ

ベッドよりおりて歩みをこころむと見えねど見えてこころとどまる

つかれつつ坐れる部屋に灯して見えなくなりぬわが夕ざくら

おのづから光の中をおつる花たちまち白く苔にちりばむ

蝶のごとくちりゆく花の花びらに蝶も交れりこのいまのとき

三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

またひとつ殖えたる右手の老斑に沁々としてクリームを塗る

疼痛に耐へて生きゆくも意義ありと悲しみながらのこの三十年

一人静の花にかがみて相共に心の内は言ひ出さずをり

移り棲みて十三年なり東を西をいまだあやまつわが日々にして

貰ひたるササニシキ白く艶ありてわが米櫃より溢れこぼるる

街中を歩める吾を翔び越えて燕は燕返しをしたり

人影かと暫く硝子戸を見つめぬき風にゆらげるあぢさゐの花

ほのぼのと茗荷の花の咲き出でぬ夏蔭くらき庭石の下

田より落つる水豊かにて溝川を抗ひながら流れゆく泥鰌

梅雨空にはつかなる西の夕あかり今日の一日の名残り惜しみて

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

午後二時の光に透るかがり火花あたかもそこに坐りてゐたり
木々の間を吹きすぐる風になびくかな蕾のおそき白花馬酔木

瑠璃色の龍の玉こもる蛇の鬚は夜来の雨にしとどなるべし

低き黄の春水仙も剪りてゆく東京に三月住む汝が部屋に

白き毛にくるまるごとく萌ゆるもの二年目ふたとせなる金瓶の翁草

金色の絲のからめる花まりの土佐萬作に夕べ雨来む

夕暮の窓にましろき花あしび忘れてゐたることあるごとし

岡先生つひの日いましし信濃路の安曇野穂高の虹鱒届く

ブエノスアイレスへ帰りゆきたり鉢前の老紅梅のほころびにけり

太竹に支へられたる紅梅をひとりの時にひとり見てゐる

三河アララギ歌集Ⅶ

河原静誠

たちまちの雪を凌ぎて帰りきぬ七宝浄土の如き吾が庭

声高に親を慕ひて言ふ吾に御本尊仏の眼優しき

母と呼び母と呼ぶる事もなく独り経誦む月の光に

手のしびれ足の痛みを歎くわれに線香の煙白くのぼりぬ

袈裟衣身にまとへども破戒して吾はけふ食ふ鯛の刺身も

黒く残る指先の跡ある白衣洗ふ白き泡立つわが洗濯機

朝もやのこめたる中の金堂に看経の尼百人が坐す

後継者の少なき今を語り合ふ夏安居に集へる老いし尼たち

ライラックの花紫に白に咲く藻岩の山の尼の夏安居

最果ての藻岩山観音の夏安居の籠りの尼にわれも加はる

催花雨さいかう

蒲郡 岡本八千代

昨日きのう今日催花雨とふ名の雨ふりなり傘さしてわれに訪なふ人なく

くれなるの梅の花より落つる雫くれなる光り光りつつ雫す

雫するくれなる光るにまた思ふ愛するとふはどういうことなのか

今日もたゞわれの独りの時間にて哀れともまた淡々として

独りなば独りの昼飯静かにも黙々として過ぎつつあり

道歩むわれに子鴉の声のして見上げたれども姿は見えず

今日よりはモンペ姿のわたくしよ朝から晩までモンペ姿よ

白秋の柳川はくしゅうやながはよりの帰り道買ひにし久留米くるめの緋かすりのモンペ

この日頃はモンペ姿のままにして遺影に見せて話しかけたり

一日中モンペ姿のままにして何にもせずに本読みてをり

いつしかにわれを岡本と呼ぶるもごく自然体に暮しつつあり

久しぶりに君と歩みし海への道春風吹きて潮騒にほふ

或る時はめそめそとして涙ぐみ君との永訣たしかめにつつ

届きたる書類のことばに驚きぬオカモトイサオ「消滅通知書」

見上げたる今宵の空に半月のしろじろとしてたゞ白光り

ひな祭り

豊川 弓谷 久子

弥生とは名のみ日本列島を春の嵐が荒れ狂ひをり

節度無き嵐と一人ぐちりをり爆弾低気圧の春一番

さっぱりと髪を短くカットせりおひな祭りに招待受くる

ひな段のお内裏様の横に立つ先づは一枚記念写真と

色あせぬひな人形の七段飾りみさとと共に二十二年目

子と孫の手料理並ぶ昼食に満ち足りてをり桃の節句を

残されし桃の木一本花咲き初むる君の住みゐし屋敷の跡地

定まらぬ氣候の中にも我が庭は花咲き揃ひて春は満ち来る

おつかさんと心の中で呼んで見る春の彼岸に逝きにし母を

春彼岸母のたち日に雨が降るあの日も雨の葬式なりき

教へ子を送る日子の着しこの着物孫が今日着る卒業式に

胸高にはきし袴は海老茶色みさとが大学卒業の日よ

御津山を一望出来るこの農道我の一人の花見の席ぞ

御津川のほとりに住みて半世紀今年も逢えたり御津山桜

満開の御津山桜を眺めをり心すむまで只眺めをり

富貴寄

東京 今泉 由利

火の球と燃えてゐるのか太陽の光を受くる日向ぼっこ

ひと蕾ほぐれたちまち始まりぬ日本の国を覆ひて桜

恐竜より先に存在せしという土筆よ土筆スケッチしてゐる

三桎の樹皮も混じりてゐるだろふ日本のお札のつやつやつやし

百代の過客のなかに連なりぬ江戸和菓子富貴寄干菓子

御神酒一盃二盃三盃目おかわりしつつ明治神宮

神宮の百年前は荒地とて今日の若葉の深々杜を

素晴しい未来のあると思ほへて朝日を満たす私の部屋

父母の歌集を抱き^{いだ}日本を離陸せし日よあのことこのこと

思い出と新しきとをつなぎゆく父と一緒に母と一緒に

夫を偲びぬ

岡崎 林 伊 佐 子

老衰は枯木なりしと言ふ声を聞きつつ偲ぶよ夫の最期を
炬燵にて眠りしままに逝きし夫呼べど答えぬ穏やかな顔
神殿に祝詞のりとをあげて手を合わす写真の夫は微笑てをり

十二月の末は夫の誕生日祝ふことなく夫は逝きたり

定年後グラントボールを楽しみて優勝の盾たてが形見となりぬ

母として祖母なる吾は生きて行く方策たてて家を守りぬ

息子ことふたり彼岸の墓に供物そえ花を飾りて夫をねぎらふ

「またくるね」と言葉かけつつ去りて行くわれを送るか鶯の鳴く

去りがたくみ墓に立てば今もなお夫のゐませる如き錯覚

端境期の野菜の高値に食べ余す白菜大根は友らに配くばる

若き日に夫に賜わりし国語辞書歌を学びて表紙やぶれる

石巻山

豊川 安藤 和代

紫陽花の芽吹きさみどり三センチつんつんがんばる北風の中
窓に見る石巻山は清すがし夫は体調良好と言う

退院はいつかと問うる夫にただ庭の杏のふくらみ告ぐる

入院の生活多き夫の為好物持ちて今日も通はむ

老ろうの介護互いに飯こぼし笑って拾いひろって笑う

日輪の色やわからに春を告ぐヒヤシンスの芽紫のぞく

人影の動きはげしき広き畑春の香りが風にのり来る

春風がやさしく鳴らす裏の木戸こんな音にも心ほっこり

嫁がせし姪にはうれしこの春は岩田の帯のいるらしき文

春の畑玉葱苗は育ちゆく根本は白き太さが目立つ

椿

春日井 清澤 範子

疲れて帰る娘を迎える玄関に出づれば満月吾を照らすも

目覚よく床の中にて思ひたり最善尽そう今日の一日

朝市に娘と車を走らせて小松菜菜の花青青を買ふ

八王子神社に通づる信号機街路樹剪られ見やすくなりぬ

低気圧は北に発達し遅霜の降りる朝なり吾が菜園

八王子神社の舞台に腰かける暖かき今日は膝も痛まず

吾が庭に梅の咲く木はなけれどもうぐいすの声彼岸の今日に

うぐいすの声聞きながら楽しみて台所にて蕪を洗ひぬ

庭に咲く紅白混じりの椿花中に真紅の大輪開く

夫と吾娘と三人の暮しにて皆腰膝に痛み持ちをり

時 空

大阪 伊藤 忠 男

私とて時空のゆがみをもたらすか宇宙のなぞは深きものなり

過去未来逃げ場無しとて嘆くまい今の重ねが過去未来なり

肉体の動き衰え声も出ず自力脳のみエス・ホーギング

僅かなる頬の動きで限りなき宇宙の動き伝えた偉才

警告か予測かさては現実か地球滅亡温暖化より

良きにつけ悪きに付けても時経てば忘れ去らるる悪しき世の中

時既に遅きと言えどまだ時を楽しむ時のあるが嬉しや

過ぎて行く時の流れに逆らえど我が行く道に迷うことなし

濡れ縁にあぐらをかきて月眺めうつらうつらの卯月明け

時過ぎる眠りの中で夢を追いうなされ寝汗今も変わらず

啓 蟄

東京 森岡陽子

春夕焼五重塔の相輪を日射し柔らか優しくつつむ

カーリング「そだね」「そだね」と声掛けるバナナ苺のもぐもぐタイム

春の雪そつと降り来てすぐ消へる手のひらの上左肩の上

うららかな日射し追ひ追ひ我と犬ただのんびりとごろごろ一緒

紅梅にそつとそつと春の風蜜吸ふ目白の二羽となりぬ

しぶき浴ぶ声あげ騒ぐ幼な子の髪の毛濡るる上野噴水

石神井池三宝池に残り雪再び訪ねる草木芽を吹く

雨に濡れ開花を待つは沈丁花香りここまで届くのは何時

昼下りコーヒータイムの花ミモザ嬉々と雀の花をゆらすよ

啓蟄や尽き行く虫と生る虫土竜の穴の土はやわらか

花かげ

東京 足立 晴代

はらはらと散りにし花びら風に舞い春の訪れ今ここにあり

空澄みて早々と夏の訪れと思う間なしに冬来たるなむ

春の陽のひざしを受けて甲羅ぼし岩に見まごう亀の子のゐて

花かげに親子集いてさんざめく春の陽あびて楽しかりけり

子供らの元気あふれる歌声に春の訪れ平和なりけり

城南宮

豊川 白井 信昭

ラグーナの道ゆく方に疾風の戯れるごと砂巻き上ぐる

この度は大根葱にブロッコリー在所よりの葱はプランターに

白川の堤防改修年度末早期開通いつになるやら

音羽川に少し傾くしだれ梅蕾ちりばめうす紅に

花びらの紅をのせて音羽川流れゆくなり行方ゆくえはしらず

朝朝の窓越しに見ゆ雪柳萌え出づる春となりにけり

朝よりの行楽日和とバスツアー京都は五月の陽気となるらし

方除けの城南宮は花の庭源氏物語彷彿ほうふつとして

神苑の苔むす庭に想起する平安時代の曲水の宴

混み合える城南宮の梅まつり気温はあがり今たけなわ

小江戸佐原

蒲郡 杉浦恵美子

登校の高校生等と擦れ違ふ小江戸佐原の我は旅人

掘割は澱みて春に未だ遠き佐原小野川畔を歩む

忠敬は老病抱へて日本全土を測量せしとぞそれも徒歩にて

測量の一步が我には大股ぞ忠敬足跡十七年四万キロ

満月が銀座のビルの谷に浮かぶ今日から弥生教へ子転勤

教へ子の転勤祝ひに落ち合へり銀座八丁目早春の宵

望みなどさしてありはせぬ我なれどビルの谷間の弥生の満月

藪椿団栗のみが落ちてゐる鐘鑄場地蔵の掃除当番

話題には子規や賢治や茂吉出で教はりしことどもまざまざ浮かぶ

単調に規をはみ出ぬ我が暮し雨音聴きつつ床にて想ふ

貝母の花

豊川 山口千恵子

暖かくなりゆく日々の今日こそは髪切りにゆかむ二月の尽

物干しに一羽のみなるジョウビタキ今朝も来てゐる塹は何処

庭隅に白く垂れ咲く雪柳雨上がりの空すみわたりたり

冷えし足電気アンカに温めつつ真暗闇に眠とぢゐる

昨夜吹きし嵐に半分破れとぶ早期祠堂会の寺の張り紙

植ゑ替へたる睡蓮の甕の泥水に今朝降る雨の雨粒落ちゐる

田の隅の土をすくひて運び来し睡蓮植ゑむ黄花のスイレン

忽ちに貝母の花咲きにけり内側見せずうつむける花

そここの裸木花の咲きはじむ春を待ちゐし桜の木々は

軒下にひとかかえほどの桜の枝五分咲きなるをバケツにつけあり

平凡な日々が好き

豊川 夏目勝弘

日差しやや強くなりこし朝あしたなり書斎に入りこし大きな花蜂

閉めきりし書斎の窓を上下するその花蜂の羽音の煩し

真横より差し込む今朝のその日射し左の頬の血潮がたぎる

物なべて諸行無情のこの世なりならば平平凡凡がより

朝の日の移れる早し繁りこし庭の草をば退治にかからむ

雲のなき四月一日の朝の空ゆるり流るる白雲見たしも

いと小さき実の見え初むる庭の梅散散と舞ひくる桜花びら

来し方に残せる物なし思ふときとりとめもなきあれやこれやと

庭隅のハランの広葉は不動なりわが吹く息にしばしを揺らす

明日はまた竹の子を堀りにと思ひみつ今夜に一雨あればうれしも

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

車窓より見ゆる景色はどこまでも酸性土壌の白き砂なり

累々と歴史を重ね風花せる風の城塞砂の城塞

城塞の高所に立ちて眺むれば小さき竜巻おちこちに見ゆ

闇に浮かぶオレンジ色の楕円形地獄の門と名付くはむべなり

地を這いて燃ゆる炎のゆらめきに天上の闇落つることなし

アムダリアの流れが語る三千年栄枯盛衰を砂漠化に見る

長流に幾多の生命誕生し養われしや大河光れり

教会につづく丘より眺むれば天草の青天と地に満つ

街路樹の影さやかなる白日に路面電車の線路光れり

長崎のいちばん高い場所にいて眼下に花火上がるを見たり

三宅千代遺歌集『永き日を』

シャツターのスイッチ閉ざす寒きおと晩年ひと日また昏れてゆく
吾はいま孤りにあらず柔らかき頬寄せくるる児らの傍らかたわ

永く生き医に携わりしわが一世「逢えてよかった」と聞くと嬉し
八十七年生きてようやく女われおみな二十四時間すべて吾がもの

よき日にてまた今日もあれ何処までも光る落葉の音ふみながら

山上のわが窓群れて桜花永く孤りを生きて来たりき

風立てば風ゆくままに匂う道老いびと独り歩きゆくなり

戸開くれば粉雪どつと舞いこみぬ黙して独り老いの棲む家

ひもすがら水の音のみ聞きて居りやはり幸とは独りなること

御津磯夫、今泉米子のその時より、後に今泉由利にもご交遊いただきました。これから先もずっとずっと私の心のお方です。ありがとうございました。

今泉由利

贈呈誌

森岡陽子

鹿兒島アララギ第七九号

郡山繁幸

○野牡丹の破れ茎切りて春までの眠りにつけと落葉かけやる

鹿兒島アララギ第八〇〇号

江藤金博

○雪のこる上高地の岩陰に二輪草咲けり風にゆれつつ

牧せつ子

○庭の焚火で作りし焼芋の旨かりしと一児の父となりし孫言ふ

青森アララギ第四〇四号

木下友蔵

○「遠くから雪の匂ひす」早朝に店先に立つ娘の言へり

柊（北陸アララギ会）二月号

南部輝子

○海原も空も黄金のひと色にいま夕映えのきはまれるとき

不破和子

○深ぶかと夏の広場に影ひきし櫛はすつかり葉を落としたり

柊（北陸アララギ会）三月号

近藤淑子

○雪片が一つ一つ影もちて舞ひつつ薄明のそら明けてゆく

○朝焼けに染まる水面に鴨群れて輪を描きおりおのおの自在に

佐々木由紀子

冬雷 三月号

天野克彦

○あらたまのぬばたまの闇に對ひをり山の靈氣を胸いつぱいに

吉田綾子

○立ち枯れて乾ける菊はかしゃかしゃと門より吹き来る寒風に鳴る

冬雷 四月号

水谷慶一郎

○透きて射す朝のひかりに水鳥の動きしだいに活発化する

関口正道

○稻田への水路の落しは外されて浅き流れに芥の留まる

秋楡第九七号

杉山千里

○あるじなき蜘蛛の糸まだ軒にたれ枯れ葉つかみてさらされて

月虹第一一九号

駒ヶ嶺泰秀

○数拾年もらひし賀状一枚一枚読みては捨つる深みゆく秋

井村喬泉

○湖畔にて反射されたる陽のさして古書屋の窓辺にほこり泛びぬ

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

いましばし陽溜りのなか佇みぬ稲叢の匂ふこの畑中のみち

宇宙をば旅せし藻入りの飴ひとつ舐めつつ読みをり「水仙月の四日」

山崎俊子

栃木の酒「惣誉」そうはまれといふを持ちきたる青年と酌むこの春の宵

立志式をスキー合宿にて行ひしと中二の孫の二月のたより

三田美奈子

家に待つは妻子つまこか親か夜通しの道路工事に粉雪の舞ふ

若かりし母の使ひし古ミシン踏みゐる今宵二月の寒き夜

水野絹子

わが母の贈りくれたるお雛様四十五年経て今宵飾りぬ

オリンピックメダルを取るも取らぬ人もそれぞれに答ふ言葉の重さよ

牧原規恵

流行のインスタ映えにはならねども今宵は温きおでんにするか

春告げる「お不動さん」の貼り紙に小糠雨ふる濡れて光れり

稲吉友江

海の辺のカフェに語らふ私たちいつしか海照り西の方へと
久し振りに夫のワイシャツにアイロンかけ子らの使ひし机の上にて

鈴木美耶子

亡き父の三十七回忌向かへをり夫と歩みし年月憶ふ
僧の経流るる部屋ににこやかに幼と飾りし雛並び居る

吉見幸子

雨風の気配は遠し二重窓何故かボーツと暮らしつつをり
本当に何も聞こえて来ない部屋朝な夕なに二重窓開けつつ

牧原正枝

恐々と雪残る道下りをりハンドル握る手に力入れて
こわごわ

懐かしのメロデー流れるテレビより亡夫つまのはな唄かさなりて聞こゆ

石田文子

届きたる「三河アララギ三月号」君をおもひて吾もピュアになる
君のうた「朝の五井山」かの人ひとの「老ひの夢」の歌しみじみとして

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

深呼吸紙を入れ替え筆を取る墨は乾くがこころ渴かず

愛知県立蒲郡高等学校三年

山口 岬姫みさき

ファインダー通して気付く友だちの違う表情心に映る

光ヶ丘女子高等学校二年（愛知県）

小林 あゆみ

泣けばいい無理に止めたりしては駄目涙止めたら心も止まる

光ヶ丘女子高等学校三年（愛知県）

近藤 菜於な お

誰もいないある教室で独学の辛い気持を鉛筆は見てる

愛知県淑徳大学留学生別科

劉りゅう

婧彤せいとう

えさをやりなついてきたとパパ笑顔そろそろ気づいて使われとんで

兵庫県立三木高等学校三年 吉田 莉菜^な

トウシューズはいた私の背中押す聞き慣れた音で光る舞台へ

ノートルダム清心中学校二年 (広島県) 花田 里桜^お

君からの通知がないか確かめる10分ごとに重なる指紋

広島県立総合技術高等学校三年 池内 絵美香^か

測量は電卓たたき距離測り外でも中でもいい汗をかく

広島県立広島工業高等学校二年 山田 尚^{なお}

御津磯夫短歌鑑賞

5

「月虹」 鮫島 満

この水に水車を動力と利用して早かりし紡績にわが家敗れし
佐吉よりもはやく紡績を試みて武家の商法にわが家^{ほろ}汨びき

『かうしんばら』昭和五十七年

子どもの頃の私は伝記に熱中した。野口英世、北里柴三郎、豊田佐吉など学校の図書室の伝記物は外国人のものを含めて全部読んだ。成人して、友人の案内で名古屋のある店に行き、居合わせたその友人の友人に名詞を貰った。(株) 豊田自動織機の社員だった。この時少年時代のことか思い出された。豊田佐吉の作った会社だ、自動車のトヨタの親会社なのだと思った。まだこの時代に自動織機を動かしているのかと思ったが、これは尋ねなかった。

佐吉は明治二十三年に豊田式木製人力織機を発明、明治二十九年に人力織機を発明、そして大正十四年には自動織機を完成させている。

さて、磯夫の歌。私は磯夫のことは医師であったこと以外は何も知らないが、明治三十五年に生まれているから、「佐吉よりもはやく」紡績工場(水力)を操業したのは磯夫の父の代であったのだろうか。「この水に」というのは今泉(磯夫の本姓)家のある三河を流れる幾本もの豊かな川のことであろう。

二首目に「武家の商法にわが家^{ほろ}汨びき」とあり、それは悔しいことであろうが、磯夫は歌にその気持ちを強く出してはいない。今泉家の先祖が武家であったかどうかは知らないが、ここでは性格に知る必要はない。要は商売が下手だったということなのである。ただし、この二首の恬淡とした詠みぶりの裏には、この尾張、三河で佐吉よりも先に紡績を創業したのだという誇りのようなものがあるのかもしれない。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

妹が家もつぎて見ましを大和なる大島の嶺^ねに家もあらましを

妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大島嶺爾 家母有猿尾(②九一、天智天皇)

(口訳) いしいあなたの家をいつも見ることが出来たらなあ! あの大和の大島の嶺

にあなたの家があつたらなあ!

天智天皇が鏡王女に賜わった御製の歌。鏡王女は鏡王の女、額田王の御姉で、後に藤原鎌足の正妻とられた方。この歌はそれ以前のものであろう。天皇も近江の天津宮時代以前でまだ皇太子として難波在住の頃の御作かと思われる。結句の「家」は初句の「妹が家」を繰返したもので、一云の句によると、その「家」は天皇御自身の家となつて、本歌に比し声調も伸々と行かないし、意味も平凡通俗になつて詩から離れてしまう。「家」の繰返し、「見ましを」「あらましを」の繰返し、この単純な姿が万葉本來の姿なのである。天皇のかの「わたつみの豊旗雲に入日さし……」(①二五)の華麗雄大の作とは又違つた、莊重沈厚の響をこの作はたたえ、集中の佳作たるを失わない。

童謡 「ゾウさん とんだ」

高橋 育郎 作詞

ゾウさん おさんぽ すきなね

そうね おさんぽ だいすきだ

おはなばたけが きれいだよ

チヨウチヨが ヒラヒラ 楽しそう

ボクも とべたら いいのにな

ゾウさん きょうは どちらまで

そうね やつぱり あの森だ

みどりが きれいに ひかてる

ことりの コーラス すてきだよ

ボクも あの空 とびたいな

アラアラ ゾウさん とんでいる

ゾウさん とんだ うれしそう

ゆめが かなって よかったね

「啄木歌集」

大正十二年十月二十五日印刷

紅玉堂書店

寝つつ読む本の重さにつかれたる手を休めては物を思へり

何をすれば此處ここに我ありや時にかく打驚へやきて室を眺むる

何事も思ふことなくいそがしく暮らせし一日ひとひを忘れじと思ふ

不來方こずかたのお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心

石ひとつ坂をくだるがごとくにも我われけふの日に到り着きたる

わが恋をはじめて友にうち明けし夜のことなど思ひ出いづる日

かにかくに洪民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川

ほたる狩川がりにゆかむといふ我を山路にさそふ人にてありき

わが思ふことおほかたは正しかりふるさとのたより着ける朝は

『俳句』

春疾風屋根越へてゆくポリ袋

山迫京子

家苞の草餅まづは仏壇へ

観覧車の天辺に見る雪解富士

雨傘の杖となりたる彼岸の日

森岡陽子

草団子声届くよな向ふ岸

紅椿落つも華やぐ黒き土

色も香も草より美^{うま}し草の餅

田中清秀

仏壇に草餅供ふ小さき手

馬酔木送く山もや深きミュージアム

古民家の黒塀越しに枝垂梅

浜田紀政

ラリー音俄かに消えて春驟雨

民芸店壺型花器に山茱萸

雨もよひ何より白き花辛夷

松本周二

紀ノ川の匂ひでつつむ草の餅

南朝の行宮の地や山桜

草もちや蓬摘みし日懐かしむ

重野善恵

夕闇に紅より美^{うま}し白椿

木の芽風花粉防止のマスクかな

落椿土に零^{こぼ}るる花の蜜

今泉由利

萌立つるニユートン林檎の木下^{こした}にて

それぞれの個性をもちて春萌ゆる

青空へ真つ白くして辛夷かな

柳田皓一

お彼岸のきれいな花の墓苑かな

向島一つ頬張る草の餅

小さき手の祈りのいくつ花辛夷

植村公女

花連翹こんがらがって風拔けり

立話続いてをりぬつくづくし

美術科の卒業展や蕾の絵

今泉如雲

土匂ふ弘前城の本丸に

大鰐といふ湯の町や雪解川

かさね吟行会

「小石川植物園」 三月

田中清秀

青木昆陽の碑は赤く大きな芋に似た石に甘藷試作地跡と書かれている。享保年間、昆陽は飢饉対策として甘藷（サツマイモ）の栽培研究を行い試作は成功し、やがて全国的に伝播し多くの人びとの命を救ったと言われている。大正十年その功績をたたえて記念碑が建てられた。

小石川植物園は元々館林藩の下屋敷で白山御殿と呼ばれ、後に第五代將軍綱吉となる松平徳松の居邸であった。約三百二十年前に徳川幕府が薬草園を開設したのがこの植物園の遠い前身である。現在の正式名称は東京大学大学院理学系研究科付属植物園。面積はおおよそ四万八千坪で台地や傾斜地、泉水地などの地形を利用して様々な植物が栽培されている。

平成三十年三月九日小雨、都営三田線の白山駅に集合しタクシード植物園に向かう。植物園には青木昆陽の記念碑の他にも、ニュートンの林檎の木（万有引力を発見した木を接ぎ木によって分譲されたもの）やメンデルの葡萄（遺伝子の実験に用いた由緒ある葡萄の分株）などの貴重な植木がある。さらにナツメやカリン、サンシユ

ユなどの薬用樹木、オウレン、マオウなどの薬用植物が沢山植えられている。日本で最も古い植物園で世界でも有数の歴史を持つ植物園であり、国の史跡および名勝に指定されている。植物研究の学者だけでなく訪れる一般の人びとも楽しくそして興味深い花の園でもある。

食するか植ゑて待たむか種の芋

由利

内気なる人や密の花こぼる

周二

春の雨古木の森に迷ひ込み

紀政

まず目を引くのはカンヒザクラで綺麗に咲き揃い花の香りに誘われた多くの野鳥が集まっていた。早咲きと下向きに咲くのが特徴と言われ濃い桃色の花弁が美しい。また、カンヒザクラとオオシマザクラの自然雑種のサトザクラ（河津桜）は近年有名になり多くの観光名所に植えられている。

その他に今咲いている花はコブシ、ミツマタ、マンサクやアセビなど早春を彩る花の木が中心である。

柔らかき小雨に濡るる山茶萼

清秀

にわたすみ
潦に並べし如く落椿

さち子

昨夜来の雨の名残なのか多くのツバキの花びらが散り

敷かれていた。サガンカは花びらが個々に散るがツバキは萼だけを残して丸ごとぼろり落ちる。木の周りや水たまりに重なった花びらは美しくもあり潔く哀れでもある。

落椿ひとつひとつに黄の蕊
雨にぬれ道を飾りし落椿

皓一
れい子

植物園本館には植物標本が約七十万点、植物学関連図書は約二万冊納められており内外の多くの植物研究者に活用されている。また、園内にはこの長い歴史を物語る由緒ある遺構も残されている、その一つである旧東京医学校本館は赤いレンガと白壁の瀟洒な建物で、前面に配された日本庭園は綱吉が幼少の頃住んでいた白山御殿の庭園に由来する。おとなしい石組みと端正な地割りは心を和ませる一角である。

通り雨乗せ傾げたる初桜
しつとりと花の蕾の紅うすし
月宮殿てふ名の白梅の薄みどり

素山
陽子
京子

続く梅林には約五十種百株あまりが集められており、咲き残る花香が立ち込めていた。梅は春の花に先駆けて

咲くところから「花の兄」とも呼ばれ、色は白や紅、薄紅、また、一重咲と八重咲があり清楚な気品が古くから愛されてきた。梅が終わると次はいよいよ桜の季節となり、園内に植えられているソメイヨシノの古木が開花の時を向かえる。桜はその花盛りを愛でるだけでなく、待ちわびる心と散り急ぐ風情も合わせて楽しむ日本人の心情に合った奥深い花である。その薄紅色の美しい景色を思い浮かべながら植物園を後にすることとした。

■かさね吟行会■

日時 五月十一日（金） 11時集合

場所 芝公園

集合 芝増上寺山門

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（七三）

丸山 酔宵子

『逗子葉山（逗葉）の匂い』

東京駅から横須賀線に乗って横浜を過ぎると、戸塚あたりから緑が濃くなり何かほっとした雰囲気になってくる。大船で茅ヶ崎、小田原に向かう湘南電車と別れ、三浦半島に入って北鎌倉、鎌倉を過ぎ、小坪のトンネルを過ぎると漸く逗子にたどり着く。横須賀線は明治以来、帝都東京と帝国海軍鎮守府の軍港横須賀を結ぶ重要な幹線として発展してきた。逗子で東京、横浜からの通勤客の大半が降り、前5輦が切り離されて横須賀や久里浜に向かつていくのである。

逗子駅を利用する人たちの中には、鉄道のない葉山から通っている人達も数多く、葉山の住人にとって、逗子無しでは通勤も買い物も生活も立ちいかない。其れでは合併し行政の効率化を図ればと長年に渡って協議画策されたが葉山は天皇陛下お気に入り、の葉山御用邸を持ち、

風俗店は勿論パチンコ屋も無く、三浦郡葉山町の一郡一町を誇りにして、直轄地気取りで話に乗ってこない。

逗子は戦艦三笠の東郷平八郎元帥も住み、東郷橋も残っている通り、戦前より海軍関連特に高級将校たちが住んでいた。逗子の海岸沿いの細い道には、瀟洒な住宅が現在でもずらりと並んでいて、落ち着いた雰囲気を感じさせる。

小坪から鐙摺（あぶずり）まで、富士山をバックに相模湾を臨んでいるのが逗子海岸。真つ青に晴れ渡っているが、強い寒風の中、ウインドサーファーが遠くに臨む富士山に向かつて疾走、将に絵に描いたような冬の逗子海岸である。

葉山マリーナに行く途中、渚橋の対岸で、今はファミリーレストランになっているが、ここが、石原裕次郎、慎太郎が小樽から引越してきた場所で「太陽の季節」の誕生の地である。裕次郎のレジエントは今でも逗子葉山に残っていて、慎太郎刈りの床屋、ケーキの玉屋、カレー屋、焼き鳥屋、バーなど裕次郎の舎弟たちがいいオッサンになって、肅々と受け継いでいる。

裕次郎一家が引つ越してきた隣家が、地元の旧家の川地家で、それが縁で「陽の当たる坂道」の裕次郎の弟役に抜擢されたのが、生涯裕次郎を兄と慕い続けた川地民夫である。

川地民夫とは葉山で家も近く、「丸山君、もう一軒行こうよ・・・」と良く逗子や鎌倉で飲む機会があり、たばこ片手に美味しそうにグラスを傾けていた。また歌も大変うまく、学生時代にバンドを組んでいたこともあり、楽譜が読めない裕次郎に代わって、歌い方を教えたそう。だ。裕次郎の生存中は裕次郎の裏方に徹し、一切表面上は歌わなかったそう。しかし裕次郎が亡くなった後は、「東京港」など新曲を出し、その裕次郎を凌ぐ低音をよくスナックで聞きほれたのであるが、先日79歳で亡くなった・・・。

合掌

帆を張って富士に向かうぞ寒怒涛

酔宵子

ある自然科学者の手記(72) 大橋 望彦

『何かをしている人間』

人間は見たものを分析し、それを再現し、そこにあった物以外のものを創り出す能力がある。

折角、与えられた人間の特徴を最も有効に発揮することの出来る、自己主張があつて、オリジナリティ(原性・固有性)が確立するからである。オリジナリテイのない芸術も、科学も存在価値がない。

芸術と科学に共通するものが沢山ある。両方の世界は、確かに異なるように観えるが、共存することが出来るのである。芸術家、科学者どちらにもハングリー精神が必要とされている。

芸術家も科学者も、問題意識を常に持つ。それは常に無限の広がりを持ち、その広がりには、自分自身で拡げて

いる。芸術家も科学者も常に問題を抱え込み、常に悩み、そして没頭する。

人間は健康であれば、『何かをしなくなる。』行動力とでも云うのであろう。其処で考える。『何をしようか。』目的、とか目標とか云うものである。それぞれの目標とするものや目的があつても不思議でない。『何か今までに誰も考えたこともないようなこと、したことのないようなこと、をしてみたい。』これがオリジナリテイ(固有性)の始まりである。『何かやるということはその辺で決まってくる。』云ってみれば、『好きこそ物の上手なれ』が高じて専門家となってしまうことで良い。誰よりも一歩先を進んでやればよい。要は、『何かやった』で、事は決まる。

そのために学校に行つて知識や技術を学び、誰にも引けを取らないものを身につければ、後はそれを如何に磨くかに係わってくる。中には、学校に行かずに直接師匠となる専門家に教わり、技術なりを見につけ、それを基

に磨き上げて立派な創作に入る人も居る。そのとき師匠からもう十分に技術を身につけたことを証明する免状を戴く人も居る。これは、この権威を一般化するために国家統一を図ったのが国家試験ということで、特に技術関係の資格取得として広まった。一方では、科学者には学位という肩書きが付くようになった。ところが、芸術家にはその様な制度が適用されずに相変わらずの徒弟制度の名残のような免許皆伝が幅を利かす時代が続いている。とはいっても、この権威あるものの判断に委ねられているのが、本物か、贋作かを決める鑑定である。『何かやっていたら良い』のではないので、やはりここにもオリジナリテイの評価が問われるのである。

『何かする』ことは容易であるが、『何が出来た』は難しい。出来たと思うのは主観であって、客観的には果たして出来ているかどうかは結論が直ぐには出ない。誰が客観的判断を下すのか？　これが世にある『展覧会』とか『展示会』なのであろう。当然、其処には作品の価額

が提示される。作品の価値判断が行なわれるのである。科学者がそんなことをしたらば、直ちに葬られてしまう。買い手が全く付かないと、自分の作品の評価が悪いと悲観してしまう。これは必ずしも当たっているわけではなく、買い手の購買力との相関（駆け引き）がそこにはあるのだが、受け取り方は、直裁的に、自分の作品は駄目なのか、と、悲観してしまうのである。この問題に面と向かい事実戸惑った。其処で判ったのは、買う方の側にあったときにはなんと無責任に価額設定をしていたのであろうか、ということであつた。その作品の評価をする前に、自分の懐勘定の方が先であつたり、何の根拠もなく値切つたりもして、全く身勝手な態度を深く反省している。これからは、作品の値踏みをする前に『何でこの価額が設定されているのか』を考えるようにしよう。

「江上浩二の独り言」 5 江上浩二

灯台下暗し

平成19年7月13日金曜日、夕方、用事があってJR浅草橋駅から蔵前方面へ向かって歩いてた。以前、歩いてた時は大通り（所謂国道6号線にあたる）の右側を歩いていて、隅田川沿いのある区画が母校の前身東京職工学校が蔵前に設立されたところだと知った。近くの榊神社に何々云々と書かれた碑がある。母校はその後大正時代の関東大地震で壊滅して、今の目黒区大岡山へ移ったそうだ。

その日は偶然、何も意図せずに、通りの左側を歩いた。程よく進むと、信号がある交差点があった。目の前は蔵前橋通りで右手に行くと蔵前橋だ。信号待ちをしている間に、夕方でこれから台風（4号）が到来しているの薄暗くなってきた最中に、なにやら掲示板が立っているのを遠くから発見した。こんな大それた言葉を使わずに、遠くから見えたというのは本当である。しかし、私にとっては、これから書くこうとしている出来事に対しては大発見だったのである。東京にいて、東京タワーに登った事が無い人が多いのと同じで、登って展望台に立ち何も発見せずに降りてきてしまった人達へは、ただ苦勞様と言いたい逆の気持ちである。

掲示板の正しい説明書きは、区が設立したもので、どこかにされているとして、以下私の文でお話したい。

浅草天文台があったそうだ。

新宿牛込より西暦1782年（天明2年）に移転してきたそうだ。

正確な暦を作るための幕府の天文方という御用、役所である。

蔵前、浅草橋と聞くと近在には鳥越という古くから有名な場所があり、そこには小高い丘があつて、その丘をつぶして土砂を隅

田川沿いに埋め立て、小高い築山を作ったそうだ。さらに整地して、高さ9・3メートル、周囲96メートル（1

辺24メートル）。其の築山の上に、5・5メートル四方の天文台が作られた。其の姿は葛飾北斎の鳥越の不二に描かれているという。

私の驚きは、50余才から日本の大地図を造り始めた伊能忠敬が、天文方の役人、

高橋至時の弟子としていて、当時正確に緯度を求めようとしていたと

掲示板に書かれていたのである。伊能忠敬の起源を見つけた気分になった。

（注）新宿牛込（現在の新宿区袋町の日本出版クラブのあるところ）

さらに、1800年代に入り、天文台、天文方に蕃書和解

御用（蕃書―外国の言葉を、和に解す、日本語へ翻訳する役所）が設立されたとも書かれている。その後、洋学所、開成学校、

大学開校と変遷し、明治になって時の東京大学へ移って行ったそうだ。学問の起源は、そうすると天文台となる。

残念なのは、明治維新後、明治政府により、江戸幕府の御用、天文方（幕末には2台目の天文台が、今の九段坂上（武道館

や靖国神社の鳥居の近く）に作られたが、は廃止されてしまっ

たという。

以上が、掲示板の概略と私の気持ちである。

こう見ると、江戸時代には今の日本の礎がいろいろと見え
てくる。

かなり大掛かりに土木工事もやったようだ。今は無き、神
田佐久間町(神田川が流れている)から岩本町に辺りにあった、
お玉が池も埋められてしまった。今は不忍池だけが残ってい
る。御茶ノ水駿河台の丘も切り崩され、埋め立てに使われ
そうだ。今の八重洲や神田の下の平らな土地はこうして作ら
れたようだ。其の一つに、神田からは遠くなってしまうので、
近くの鳥越の丘を崩して、其の浅草天文台の築山に変わった
のである。

浅草天文台から、伊能忠敬が旅立ち、測量技術を駆使して
大地図が作られ、その後欧米人が日本へ来て伊能の地図を見
て、其の正確さに驚嘆したという。測量には高度な幾何(三角)
計算が必要である。

また、蕃書を解して、日本の大学が形成される礎にもなった。
当時和算が廃れていたか定かでないが、伊能のように、日本
独自の学問が継承されて、世界に通ずるものに発展していっ
て欲しかったとも思う。和算は新教育制度で、明治政府によっ
て廃されたことは残念であるが、当時の社会に受け入れられ
なかった理由もあったのだろうとも思った。もともと、新宿
牛込にあったものが浅草蔵前へ移ったのだが、そこは今の神
楽坂を登って登りつめ、左手に曲がって界隈で一番小高く眺
めの良い所で、私も知っている。考えると、現在の日本出版
クラブがあり、やはり、そこ辺りが蕃書を解する意思の起源
になっているのかとも思った。

日本の学問の始めは、天文台からと前に書いたが、天文や
地理学が発展し、明治後期には東京大学で地震研究も始まり、
夏目漱石の教え子、寺田寅彦がその教授になっている。

今や、地震大国の日本は地震観測、予知、さら津波研究で
世界のトップを走っている。

超高感度の地震計が海底に設置され、それが海底光ファイ
バーケーブルで繋がって地上にまで其の信号を伝えてきてい
る。一つ二つだけではない。ネットワークになっている。最
近ではP波情報をいち早く察知して、其の情報を大きな揺れ
をもたらす横波が到来する直前(数十秒、いや数秒前でも価
値はある)に周知させるシステムが動き出している。例えば、
10秒前でも大きな地震が来ると分かれば、新幹線などを減速、
ストップさせるのである。

灯台下暗しとはよく言われるが、一旦足元が明るくなって、
その後の顛末を書いたものはあまり見かけた事がない。この
P波情報システムであるが、10秒前だとこれしか出来ない、
20秒あるとこんな事出来る、30秒あるとここまで万全に出来
ると寺田寅彦の気持ちを代弁できそうである。これは直下型
地震を除けば正しいことで、先日仕事で訪れた大手町の東京
消防庁などは大都会東京を守るために、防災部、予防部など
の組織があり、防災は一旦災害が起きてしまったことで、どのく
らい被害を食い止められるかと検討していることで、予防は
事前予知などを含んだ災害前にどんな仕組みを作っておく
べきかを研究している。いずれにせよ、昔の胸騒ぎ、虫の知
らせただけは、万が一の時の、大都市東京の災害を防ぐこと
は出来ない。

虫の知らせを聞いた一人だけが、コンコンと、新幹線で東
京を脱出して西へ向かい逃げたつもりでも、しばらくして東
海地区辺りで其の新幹線を倒壊させるくらいの大地震が起き、
遭遇してしまう馬鹿な話にもなりかねない。虫の知らせはどっ
ちの方向までは教えてくれないと思う。

絹の話 (90)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

「第8回国際野蚕学会（インドアッサム）」

国際野蚕学会は各国の研究者が4年に1回野蚕飼育国を巡回して、野蚕に関する研究発表と生産現場の見学を通して情報交換をする為に開かれる国際学会で、日本からは日本野蚕学会を中心に参加しています。

アッサムに到る道

インドのアッサム州はインドの北東、世界一幸せな国ブータンの東に位置し、ミャンマー、タイ等アジア系の人達が多く住む地域で、世界的にはアッサムティーで有名な所ですが、世界に類を見ない野蚕王国なのです。長い間外国人の入国制限があり、昆虫学者には魅力あるフィールドです。

アッサムの州都グワハティーにはインドのデリーから毎日航空便がないので、日本から2日もかかりました。途中インパールを経由しましたので、その山並みを見て、先の大戦のインパール作戦で命を落とした幾万の日本将兵の霊に、自分はいま飛行機で快適にその頭上を僅かの時間で飛び去ろうとしており、幼少とは言え同じ時代の

空気を吸った者として黙祷を捧げるのを禁じ得ませんでした。

この地域7州の中心的、州都グワハティーはインフラ整備のまったただ中で、昔のインドの喧騒と近代化が一緒になった活気溢れる人口100万の大都市です。

第8回国際野蚕学会

国際野蚕学会は既に中国2回、日本2回、インド1回、インドネシア1回、タイ1回開かれて来ました。

一般的にこの学会はその国の野蚕研究部門のある大学が主催しますが、インドのこの地域は野蚕が主たる産業ですので、この度のインドでの学会はインド政府が管掌するアッサム州の「セントラルシルクボード」が主催しました。

アッサム州は黄金糸を採る「ムガ蚕」とカシミヤの様に柔らかな「エリ蚕」の原産地です。

インドからの学会発表は、この2種類の他にインドシルクといえば「タサール蚕」といはれる、タサール蚕を加えた3種の繭生産ノウハウの研究発表が中心でした。中国からは中国東北部の「柞蚕」に関する発表、日本からは遺伝子組み換えやホーネットシルク（蜂絹）、昆虫食等の発表がありました。

世界的に野蚕繭の生産は減少傾向にあります、イン

ドではいずれの種類も増産傾向あつて、エリ蚕などでは100万世帯を支える産業に育てたいと云う政府の計画もあるようで、研究発表も自信に満ちて活気有り、他国の発表者を圧倒していました。

さらに別会場では近隣各州から幼虫、繭、糸、布、等の展示があり、片やインド北東7州の生産業者の販売ブースも20店位の出展があつて盛会でした。

ウエルカムパーティーのファッションショーは絹のサリーと野蚕使用の洋服などで2時間にも及ぶ力の入れようでした。

2日間の学術発表と産地見学を終えて、フェアウエルパーティーでは地域の民族衣装とファッションデザイナーの作品を紹介したショーがあり、日程をおえしました。

3日目ともなると出席者が気さくに情報交換が出来る様になり、有意義な国際学会でした。

産地見学

かねてから写真では見ていましたが、官営のムガ蚕の飼育林では2齢（1回脱皮した虫）がネットで覆われた4m位のソムの木の葉を食べていました。

染織現場では色々な種類の糸を1カ所では化学染料、もう1カ所ではラックで染めていましたが、温度も媒染

剤も目分量で少々驚きました。

ムガシルクの織物は薄暗い建物の中で、初老の男性が機織りをしていましたが、他の所では女性がエリシルクを織っていました。

本来インドでは手織は男性で、糸づくりは女性の仕事ですが、こんなインドの片田舎でも織り手をバングラデイシユに募集に行くと言うのでビックリしました。

悲願のムガシルクシャツ製作

ムガシルクの糸は目視出来ないほど細い1本の糸に500〜600（産業化されている野蚕シルクの中では最も多数）の穴のある多孔質繊維で、それで出来たシャツは同じ多孔質繊維のエリ蚕やタサル蚕よりも、糸の中の空間率が25%にも及び、それゆえ軽くて穏やかな安眠を誘ってくれると推測されます。

かねてから、この素材を使って世界初のムガシャツを作ってみたという願望していましたが、1枚数十万円になると予想されましたので、今回は断念する事にしましたが、今後なんとかして、ムガシルクで手の届く価格の安眠シャツ作ろうと決心した次第です。

これが「森からの贈り物」！究極のエコで省エネの健康シャツではないでしょうか。

楽しい時間 66

山本紀久雄

2018年3月31日

明治維新150年・・・その四

ペリー来航に対する有名な狂歌「太平の眠りをさます正喜撰（蒸気船）たつた四杯で夜も寝られず」。これが当時の人々の実態であったのであろうか。疑問である。

これを指摘するのが『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』（岩下哲典著）である。

《要するに松陰ら長州藩につながる浪人らの間では、「北アメリカ国」が通商を願うために来航するということが、嘉永5年（1852）の段階でうわさになっていたというのだ。彼らにとつて「北アメリカ国」船は来るべくして来たのであって、けつして「泰平のねむりをさま」したものでなかったのである。つまり、青天の霹靂ではなかったのだ》と断定し、さらに、『この狂歌は、現在どんなに遡っても、明治期までしか出典を遡れない』、『明治11年（1878）に刊行された『増訂武江年表』には、「泰平の」狂歌が存在した』と論じ、『ペリー来航当時、この狂歌は謳われていなかった可能性が高い』と結論付けしている。

一方、ペリー艦隊と実際に交渉した浦賀奉行所も、事前に来航情報をつかんでいた。浦賀奉行所支配力香山栄左衛門は直接交渉をする責任者で、ペリーが去った後に、上申書を老中に提出している。これも『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』からみても。

香山栄左衛門の上申書は以下のように始まる。

《嘉永5年秋ごろのことだったが、明くる6年3月にアメリカ国より石炭置き場を借用すべく、軍艦を派遣するということばらの噂があった。そこで、外国のことは容易ならざることだから、浦賀でどう対処するのか心配になり、浦賀に勤の奉行水野筑後守忠篤殿に噂の真偽を内々に問い合わせた》『水野奉行も「わたしも心配していたが、真偽はわからない」とのこと、江戸に勤の戸田伊豆守へ問い合わせた、戸田においてもはつきりわからず、老中の阿部正弘に伺ったところ「これらの噂の出処としては、今年長崎に着任したオランダ商館長が提出した世界諸国の風説書の中に、アメリカ国より軍艦を差し向けるという情報が確かにあった』

戸田の求めに応じて阿部は情報そのものを開示した。

《阿部老中はその風説書を戸田奉行に下付したので、戸田は早速水野に伝達し、嘉永5年12月になってようやく事実がわかるようになった。すなわちその段階で、風説書を一覽できた》

このように阿部から戸田・水野を経由して香山に風説書が届いたので、来航の可能性があると判断したと香山は上申書に記している。

一方、松陰などの浪人が噂として知っていたということは、江戸でも同様の情報が流布されていたとも考えられる。

江戸末期の庶民に最も人気があった落語家・三遊亭円朝に『蝦夷錦古郷の家土産』という作品がある。この中で強調しているのはペリー来航から2年4か月後の、安政2年（1855）10月2日に発生した大地震の被害であって、ペリー来航については触れていない。

江戸の人々にとつて、ペリー来航はさしたる事件でなかったのではないかと思う。その理由は、遠く離れた浦賀での出来

事であつて、日常生活に直接影響を与えず、江戸っ子の今日明日の暮らしには何ら関係がない。

ここで少し、江戸とはどういう場所だったか検討したい。江戸は徳川將軍家のお膝元であつて、江戸っ子は「お江戸」と「お」をつけて呼称する。「お江戸日本橋」等である。當時の三都である京都や大坂は「お」がつかない。「お」は將軍への尊称からつけたのである。

その背景を『將軍の世紀』（山内昌之著 文芸春秋 2018年1月号）が述べる。

『お江戸や江戸っ子』という呼び名は、ひとえに徳川家康が八朔に江戸の小城へ入り、孜孜（熱心に努め励む）として町々を開発しなければ生れなかつた。八朔とは、天正18年（1590）8月1日（朔日）のことであり、家康入部の日は正月三が日と並ぶ幕府の重要な式日として、大名や旗本が登城する』

『家康は、日比谷の東、隅田川（大川）河口の西にあたる江戸前島という砂州以外に、十分な平地のなかつた江戸で、幾度も繰り返した城地拡大と埋立てによって町割りをつくつたのである』

『家康は後北条時代に原型のあつた本町通りとその周辺を整備し、徳川御用達を務める職人や伝馬業者を旧領の駿河や遠江ひいては上方や遠国から呼び寄せて、神田と日本橋の周辺に住まいを与えた。日本橋や尾張町（銀座）の呉服屋、日本橋魚河岸で「江戸前」の魚介で儲けた大旦那、浅草・本所（いわゆる蔵前）の御蔵米問屋と札差、駿河町などの本両替、木場の材木商、神田の青物問屋、靈岸島と新川の酒問屋や荷受商人。これらの職業は、長いこと町名に名残りをとどめていた。大工町、木挽町、白壁町、晝町、大伝馬町、小伝馬町、

等等といった塩梅である。江戸を関東の中心地から日本の政治的中心に成長させた徳川家康は、幕府の経済力を多様にしただけでなく、江戸の膨大な住民の消費生活を支え、雇用を生み出した歴史への貢献者でもあつた。東京の原型ひいては日本発展の中心地を創り出した家康の功績は計りしれぬほど大きい』

その証明が『蝦夷錦古郷の家土産』の安政2年（1855）大地震の詳細な描写である。これが書かれたのは明治19年（1886）で、大地震から31年も過ぎて、遠く昔のことなのに、当時17歳であつた円朝が直接経験したので詳しく述べている。

これはやはり江戸民衆が受けた被害が大きかつたからであつて、江戸の人々にとっては、被災した大地震の方が、ペリー来航より強固な記憶として生々しいのである。

現在、歴史認識上の常識では、近代の幕開けを告げたペリー来航が詳しく華々しく伝えられ、大地震の記述はわずかなのであるが、江戸民衆の立場に立てば、大地震の方が大事件なのである。したがつて、民衆集合心理・的をおく円朝作品では、ペリー来航から連なる政治上の大事件は無視されることになる。

これが円朝の常識であり、江戸っ子が円朝を受け入れた理由だろう。

歴史の検討を、①特定の時代、②特定の人物、③特定の事件から論ずることが多い。だが、当時の民衆心理を代表する円朝から判断すれば、冒頭の落首はなかつたことになる。やはり、後作であろうと判断する。

漢詩研修 (十八)

千代田岳精会 平井茂行

夜墨水を下る
よるぼくすいくだる

服部南郭
はつべうなんかく

金竜山畔江月浮ぶ
きんりゅうさんばんこうげつうかぶ

江揺ぎ月湧ぎ金竜流る
こうゆうつきわきんりゅうながる

扁舟住まらず天水の如し
へんしゅうとどまらずてんみずのごとし

兩岸の秋風二州を下る
りようがんのしゅうふうにしゅうをもくだる

金龍山畔江月浮

江揺月湧金龍流

扁舟不住天如水

兩岸秋風下二州

【作者】

服部南郭（一六八三～一七五九）江戸中期の漢詩人。名は元喬、字は子遷、通称は小右衛門、南郭・周雪・観翁などの号がある。姓は服部、服氏ともいった。京都の人。

十四歳のとき江戸に出、十六歳で柳沢吉保に仕え、壮年になって、吉保が荻生徂徠を知遇していたことから、その門にはいり、日夜勉強して古文辞を修め、徂徠から妙才と称された。三十四歳で職を辞し、江戸に家塾を開いて子弟に教えた。とくに詩文についての評判が高く、その上人格は温厚磊落、交友も広く、当時の諸侯から招かれることが多かった。徂徠の没後、古文辞学派のために貢献し、当時の文壇の中心となっていた。南郭はまた、和歌・絵画もよくし、文人として豊かな才能をもって、門人の数もきわめて多く、家計も豊であった。宝暦九年六月二十一日、七十七歳で没した。「南郭文集」四十巻のほか「大東瀨世話」「南郭先生燈下書」などの著がある。

【語釈】

*金竜山・浅草寺の東北の隅田河畔にある待乳山の異称で聖天（歓喜天）を祀る。

もとの辺は海で観音が海中から出現したが、その前にこの山が湧き出たと伝えられる。それで金竜山は浅草寺の山号にもなっている。*扁舟・小舟 *住・止・とどまる *二州・武蔵・下総の二国。隅田川は昔この二国の境（隅）を流れていたので、この称が起こった。

浅草待乳山のほとりの隅田川には、月影が鮮やかに浮かび、川の流れが揺らぐにつれ、月光が湧き出て、あたかも金の竜が流れているようである。

自分を乗せた小舟は、水のように澄みわたる空の下、どこまでも進み。二州の国境を、秋風に吹かれて下がって行く。

「歴代天皇御製歌」(八十八)

貫名海屋資料館

「大正天皇」第百二十三代・在位一九二二年(三十四歳)―一九二六年(四十八歳)

大正天皇は、明治天皇の第三皇子。大正天皇の御治世は十五年間であられた。大正十年から、昭和天皇が攝政として政務を執られた。大正三年(一九一四)第一次世界大戦の開戦。大正十二年(一九二三)関東大震災が起る。漢詩、一千三百六十七首が残される。決して大作や名吟というのではなく、誇張、修飾なく素直に詠まれた。

大屋村にて田植をみて

おくれじと田毎に早苗とるさまを今日珍しくきてみつるかな

夏鷺なつさぎ

今日もまた池のはちすの葉がくれに鷺ぞおりゐる魚ねらふらし

馬

手綱取る手のくるへるはのる人の心の駒のくるふなりけり

御軍みいにわが子をやりて夜もすがらねがめがちにやもの思ふらむ

四方拜

もろくの民安かれの御いのりも年のはじめぞことにかしこき

明治三十年・一八九七年・十九歳

武夫のいのちにかへし品なればうれしくもまた悲しかりけり

明治三十三年・一九〇〇年・二十二歳

波風にあひし御船をすゝめむと皇子にかはりて身をしづめけり

明治三十五年・一九〇二年・二十四歳

このもとに今日仰がむと思ひきやわがははそはの高きみかげを

大正四年・一九一五年・三十七歳

われを待つ民の心はともし火の数かぎりなき光にもみゆ

憶遠征

ぬばたまの夢のうちにもつはものゝ出で、戦ふさまぞみえける

戦死者遺族

國のためたふれし人の家人はいかにこの世をすごすなるらむ

大正六年・一九一七年・三十九歳

読書

いとまえてひとりひもとく書ふみの上に昔のことを知るたのしさ

寄國祝

日本の國のさかえをはるかにもまなびの業ぞもとゐなるべき

大正八年・一九一九年・四十一歳

ベルサイユ条約調印

月前陳思

天の下くまなくてらす秋の夜の月を心のかゞみともがな

社頭暁

神まつるわが白妙そでの袖の上にかつうすれ行くみあかしのかげ

梅から桜に

夏 目 勝 弘

万葉集巻五に梅花の歌三十二首と序がありその序に。

天平二年正月十三日、師老人（旅人）の家に集まつて宴会をした。（中略）地に坐つて膝を近づけ杯を飛ばし、一室の中に皆々相親しんで、景色を見ながら、相くつろいだ。

せいせいとし、気持よく皆満足した。歌でなければこの心持を表わすことはできない（以下略）。三十二首のなかの（薬師張氏福子の一首（829）に

○梅の花咲きて散りなば桜花つぎて咲くべくなりにてあらずや
万葉集には梅の歌は百十首、桜は四十三首。

奈良時代仏教と共に中国から伝来した、梅から桜に変わったのは平安時代になってから。

○山峡に咲ける桜をただひと目君に見せば何をか思はむ
（大伴 家持）

○おしなべて花のさかりになりにつけり山の端ことにかかる白雲
（西行 法師）

1872年に義務教育制度が始まった後、1904年に全国小学校で国定教科書が用いられるようになり、終戦の1945年まで続いた。

第四期の小学国語讀本は、第巻の冒頭が「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」であった。全国どこの小学校の一年生でも、初めにこの部分を読んでいた。

我々の年代が使用した最後であったと思う。小学校で覚えていたことは「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」のみで、思い出そうとしてもこれしか浮んでこない。

国語の教科書の大部分のページは、のり付けされその他のページもスミで黒く塗られて、読める所の少ない国語本であった。

運動場の周囲には桜の木が数十本余も植えられていた。四月の入学期になると、校庭は降るように散つてくる花弁で運動場は真白になっていた。細いササを折りそれに花弁を通して冠として遊んでいた。

残っている桜も、大量に毛虫が発生する等、秋の落葉の処理などで、切られてしまった。

桜に特別の思いがあるわけでもないが、忘れきれない何かがある。日本産の桜の種は十種。それが1915年のオオシマザクラ以来約百年ぶりにクマノザクラの新種と判明され十一種となった。ヤマザクラより開花時期が2〜3週間早い、葉の形が異なる。奈良、三重、和歌山県にまたがる紀伊半島南部に自生するサクラ。

梅は春一番に花の咲く木で、多くの家の庭に一本は植えてある。世界的には食用とする樹木だが、日本では鑑賞用でもある。

明治に導入された、セイヨウミザクラが日本での食用の桜であり、山桜の実は猛毒。

山桜は樹皮、木材等利用価値が多いが、梅は果実のみの利用。

桜と梅は枝への花のつき方に違いがあり、前年に伸びた枝についてた葉の付け根に、冬芽をつけ、この冬芽は翌年に花をつけ、花芽と葉芽に区分され、枝の先端部につく頂芽は、ふつう葉芽となる。そして桜の長く伸びた枝の途中の側芽は葉芽、短い枝の側芽は花芽となる。桜の長枝につく芽はほとんど葉芽で短枝は花芽となる。

一方梅は葉の付け根に二〜三個の冬芽をつけ、三個つけた場合は、中央が葉芽残りが花芽をつける。「桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿」は、剪定に対する花つきの違いを表した言葉。

「氷魚」のことから (208) 岡本八千代

やっと、春晴の天気が続くようになった。折りしも、第九十回センバツ高校野球が始まった。子規が生きていたらはどう思うか? と思ってしまう。

明るい春の日ざしが、丸坊主に刈った青少年の選手たちの頭を照らし、その姿態の美しさにも感動している私である。子規のベースボールの歌また思い出す。

- 1 久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも
- 2 若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如く者はあらず
- 3 九つの人九つのあらそひにベースボールの今日も暮れけり
- 4 今やかかの三つのベースに人満ちてそぞろに胸のうちさわぐかな
- 5 うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に

「久方の」はあめ(天)にかかる枕詞。それを「アメリカの「アメ」にかけて遊んでいると、言われている。4首目、子規の用語で言えば、「ツー除外満塁」という場面らし。

さて、愛媛県生まれの子規研究の第一人者坪内稔典先生、

学者でもあり、俳人でもあり、自ら稔典と言われたりすることがある先生の論をお借りして(「正岡子規の「樂しむ力」NHK出版・生活人新書より」ここに書く)。

「子規は俳句や短歌、文章の革新を進めるのだが、彼の文学観の著しさは、作者が面白いと思うものを読者にも面白と思わせることだった。ベースボールは見ている者も面白い、というベースボール観。それがやがて子規の文学観を結晶させる。と言ってもよいだろう。」と述べられている。

子規の面白いというベースボール観が、やがて子規の心につながり動いて、文学観になってゆくという不思議。たいていの人は、野球を観ていても、文学につながらないような気がするが、そこに子規の何かがある。その何かは、子規の抒情性の動きかしら? やはり、ちよつとしたことでも何か自分の心に動きが出てくると思うが、その動きが美しいものとしての感情となっていくことかしら??

子規の春の歌をここに載せてみよう。

○くれなゐの梅散るなべに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

○つくし子はうまなれやくれなゐに染めたる梅を絹傘にせる

○春されば梅の花咲く日にととき我枕べの梅も花咲く病床に居てもこういう歌のつくれる子規。「われはただ歌のやすやすと口に乗りくるがうれしくて」と言うではないか。やすやすね。

磯辺 耐

みなさまへ⑬

片松葉になり、左太ももにもだいぶ力が入る
ようになりました。うれしさのあまり、2Fを2周、

1Fを5周してしまいました。少し反省します。

みなさまからの あたたかい お手紙、一枚一枚と

読むたびに、太ももに筋肉がついていく感じがです。

えりかコーチも忙しいのに、届けてくれてありがとう

ございます。コーチや、みなさまにまだまだご迷惑

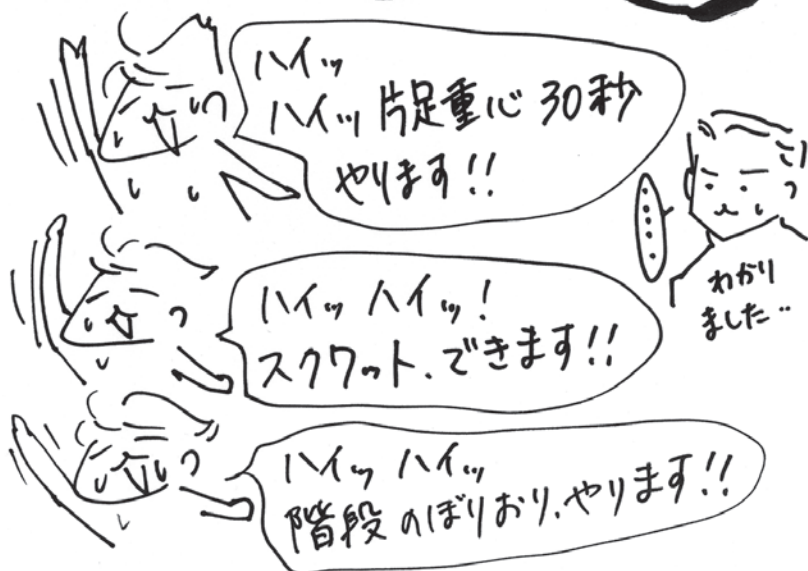
をおかけいたしますが、焦らずイケメン先生と一緒に

リハビリがんばります。みなさま、今日もがんばって下さい
ね!!



入院生活もいよいよ
折り返し!!

みなさまへ⑭



同部屋のみなさんに「リハビリ. 長いよね!!」
とされています♡



編集室だより【二〇一八年三月】

○三宝寺・氷川神社。

先月の吟行は、石神井公園、三宝寺池だった。湧水、池、鳥達、春を迎える木々草々：時間切れになってしまったから「三宝寺」氷川神社の自主調査にでかけた。

真言宗三宝寺とは、徳川家康ゆかりの御成門。境内の長屋門は、勝海舟の邸宅にあったもの。鐘楼、根本大塔、平和観音、八十八ヶ所霊場：こんなに沢山を見逃していた。石神井氷川神社は、室町時代、豊嶋氏の居城、石神井城の守護神として大宮氷川神社を覬請して創建。御祭神は、須佐之男命、稲田姫命、大己貴命。

○川口の大地主蓮沼家のバベキューに行く。川口駅にて車の出迎えをうけ、空がとても大きい蓮沼家に到着。蓮沼一家四人は、大の西武ファンで、シーズン中は応援に出掛けてしまい、なかなかおめにかかれない。この日は、西武の応援団長とか、球場でビール販売の可愛い子：とにかく西武仲間の、シーズンが始まる壮行パーティ。飲みながら、食べながら、野球をしながら：なんだか若がえる。

○佛像彫刻作品展。

御成門駅近く「東京美術倶楽部」にて。角材から彫り出すのだから、仏様の姿、全てにかかわることになり、他人の作品も、自身の作品も、とても親しい。どれだけ上手に彫りあがっているか、どれだけの努力をされたか：仏様は、沢山の「心」を教えて下さいます。

○東京ガスから「調査」が来て、私のガスレンジは、もう古くて使ってはいけなくなったものだった。何を食べて生きてきたのかな！と考えてしまうほど「ガス」を点けることがなかったな。すぐ新しいものに取り替った。

○ホーキング博士が亡くなってしまった。完全なケアがなされており、永久に亡くなることはないのだと思い込んでいた。それでも亡くなってしまふのだと知る。自身も欠けたような思いに到る。

○隅田川吟行の仕度。

桜が咲きだした墨堤を歩く。スツケースを引っぱる外人さん達が。大勢。まわりもどんどん変化して。隅田川に掛かる橋を全部描くと、せっせと通っていたことがあった。そんな昔の話ではないのに、もうあの頃とはすっかり変わってしまった。なんだかつまらない気がしてしかたがない。長命寺近く、小さな小さなワイン屋さんをみつけた。ワインをいただきながら、丁度いらした地元の方が、いろいろ教えて下さった。そして、向島花街の「揚げたて天ぷら屋さん」吟行時の昼食場所が決まるのでした。それにしても美味しいワイン。また行こう。

○石神井川へ「花見」。

石神井川の両岸に、ずっと続く満開になった桜の古木。加賀藩の江戸屋敷、お殿様が植えられたと。

時に来る風、花びらは舞いあがり、花びらは渦巻き、花びらは私にも積もる。一万歩の道程は、ただただ桜に覆われる。

野菜・まんだら

(3) 亀戸大根

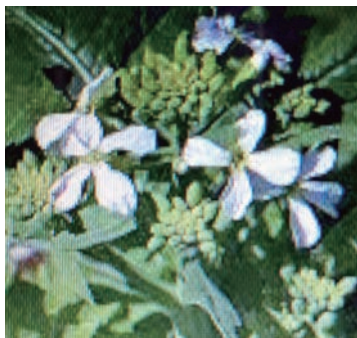


○亀戸大根は一般的大根と異なる特殊なもので、江戸時代・文久年間摂津から入植した人々がもたらしたのではないか。

○江東区の「香取神社」周辺、荒川水系によって出来た肥沃、粘土質が大根作りに適した。

○明治の頃には、さかんに栽培され、「おかめ大根」とか「お多福大根」とかよばれた。

- 円錐形の先端が細く、30センチ、200グラムほど、緻密な肉質で、歯ごたえが良い。
- 大根は、デンプンを分解するジアスターゼをふくむが、亀戸大根は、普通の大根の2倍のビタミンCが含まれ、葉には、土壌からのミネラルを多く含む。
- 清澄庭園の涼亭での会食でいただいたお弁当の中にひときれ小さく入っていた“たくわん”に“あっ”と驚いた日があった。いったいこれは“何”なのだろうと長い間思い続けていたけれど、気付いた。あれは亀戸大根にちがいない。
- 「亀戸大根たまり漬」有機醤油と紹興酒のたれに漬け込んだ“たくわん”。



- 「亀戸大根まんじゅう」亀戸大根、小松菜、クコの実、松の実、椎茸など、味噌味で入っている。
- 「亀戸大根あさり鍋」スライス大根、葉もやわらかい。えのき、白菜、あわ麴、うどん、江戸前あざりと、とても相性が良い。
- 「亀戸大根菜めし」
- 「亀戸大根せいろ飯」

森岡・今泉

第三十六回 子規顕彰全国短歌大会

応募要領

雑詠2首1組（未発表作品に限る）、何組でも可。
規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロードできます。

郵便番号、住所、氏名、雅号、電話番号を楷書で明記し、氏名、雅号には必ずふりがなを付けてください。

応募料

1,500円（2首1組）郵便小為替か現金書留

締め切り

平成30年8月1日（水）※必着

応募先

〒790-0857 松山市道後公園1-30
子規記念博物館内 子規顕彰全国短歌大会 係
電話 089-931-5566

選者

ホームページ <http://sikhakulesp.co.jp/>
秋葉四郎 永田和宏 坂井修一 中川佐和子 片上雅仁

賞と発表

文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞
後援賞／現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞
短歌研究社賞・『短歌』編集部賞・現代短歌社賞

選者賞／各選者特選3首・入選15首（計90首）
すべて大会日に発表し、表彰いたします。

入賞歌集

応募者全員に送付いたします。（12月下旬予定）

大会日時

平成30年10月28日（日）午前10時より

会場

松山市立子規記念博物館 4階講堂

記念講演

講師／秋葉四郎氏（日本歌人クラブ顧問《前会長》、
「歩道」編集人、斎藤茂吉記念館長）
演題／「現代短歌の源流 - 正岡子規を斎藤茂吉はどう咀嚼したか」

主催

松山市教育委員会

後援

文化庁 愛媛県 現代歌人協会 日本歌人クラブ 松山歌人会
短歌研究社 角川『短歌』 現代短歌社 朝日新聞社 読売新聞社
毎日新聞社 愛媛新聞社 NHK松山放送局 南海放送 テレビ愛媛
あいテレビ 愛媛朝日テレビ FM愛媛 愛媛CAV

作品募集

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒114-0021

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (03) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒114-0021

東京都北区王子本町一・二六・六・A

◇原稿は毎周末日までに郵送下さい。